審査の結果の要旨

氏名　　山本　渉

現在，わが国のスクールカウンセラー（以下，SC と略記）は，学校に必要な職種の一つとして広く認知されてきている一方，SC のより良い活動とは何かについて，利用者の立場からより詳細に包括的に検討することが今後の課題となっている。そこで，本論文は，SC にとって共に働く専門家であると同時に支援対象でもある担任教師に焦点を当て，彼らが SC にどんな期待をして協働に臨み，何を得ているのかを質的に検討することを目的とした。なお，近年は小学校への SC 配置が本格化しつつあるため，小中の共通点と相違点を検討することも併せて目的とした。論文は，問題意識，目的，構成を示す第 1 部，中学校の担任教師の体験を質的に検討する第 2 部，小学校の SC 活動の特徴を検討する第 3 部，小学校の担任教師の体験を質的に検討する第 4 部，総合的な考察を行う第 5 部から構成される。

第 1 部第 1 章では本論文の問題意識を示し，第 2 章で先行研究の概観を通して本論文で追究していくべき課題を整理した。第 3 章では本論文の目的と構成を示した。

第 2 部第 4 章では，中学校教師 16 名へのインタビューから，生徒の気になった言動の背景や理由を推測すること，生徒の抱える問題への対応を考える際に担任という立場に身を置くことで生じる様々な制約を感じることが，中学校の担任教師に SC との協働の開始を促していることを示した。第 5 章では，第 4 章と同じ対象者へのインタビューから，中学校の担任教師が SC の活動をどのように生かしているかを 4 つに分けて示した。そして，担任教師はこれらのいずれか，あるいは複数の生かし方をした結果，それまでよりも安定して対応できるようになること，さらに，SC との協働を経て安定して対応できるようになることが契機となって，担任自身の対応スタンスの変化が促される場合もあることを示した。

第 3 部第 6 章では，SC6 名へのインタビューから，小学校の特徴として，学級の子どもたちとの間に形成される緊密な関係性を基盤に，担任教師が親のような心持ちで子どもたちに関わっている可能性を見出し，第 4 部の分析の参考とした。

第 4 部第 7 章では，小学校教師 6 名へのインタビューから，小学校でも中学校と同様，子どもの気になった言動の背景や理由を推測すること，子どもの抱える問題への対応を考える際に担任という立場に身を置くことで生じる様々な制約を感じることが，SC との協働の開始を促していることを示した。一方，小学校に特徴的な点として，子どもの言動の理由に関する担任の理解のし方の中に，「自分の関わりのせいかもしれない」というやや自責的な見方があることを示した。第 8 章では，第 7 章と同じ対象者へのインタビューから，小学校の担任教師による SC 活動の生かし方が中学校と同様 4 つに整理されることを示した。また，第 7 章で小学校に特徴的なカテゴリとして見出された子どもの言動に対する担任の自責的な見方は，SC の情報や発言をきっかけに担任が子どもの問題をより広い文脈から理解できるようになることに伴って手放せるようになることを示した。

第 5 部第 9 章では，得られた知見をまとめ，本論文の意義と今後の課題を示した。

本論文は，担任教師という利用者の視点から SC との協働の体験内容を質的な分析により可視化・体系化した点，担任教師との協働のあり方に関する小中の共通点と相違点を整理した点において，特に意義が認められる。よって，本論文は，博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断した。